ちょっと寄り道　その 90　　石 廊 崎

1974 年卒 飯山道久

２月最後の日曜日に、春を見付けに伊豆半島の最南端まで行ってきました。例年であれば、河津川や青野川沿いの河津桜が見頃で、青野川河岸の道の駅「下加茂温泉湯の花」付近は「みなみの桜と菜の花まつり」で多数の人出の頃ですが、予想外の寒波で伊豆でも山では積雪もあり、この日にやっと河津桜の開花がニュースになっていました。上の写真は石廊崎の石廊埼灯台です。青空と青い海、眼下の水際を覗くと岩場に砕ける白い波、水平線上には伊豆諸島（東京都）の島々が並んでいました。写真正面中央はくさやとモヤイ像の新島です。灯台の左には、周辺が船釣り名所の神子元島（下田市）とそこに建つ灯台も見えています。海風による寒さもない好天に恵まれて、春らしい写真を撮ることができました。

石廊崎オーシャンパークの建物内に、石廊埼灯台関連年表が掲示されていました。1636 年から灯を点していたそうです。1866 年に幕府は英・仏・米・蘭との約書規定に基づく英公使からの灯明台 8 か所と灯明船 2 か所（本牧沖・函館）設置要求を受入れ、1868 年新政府が 4 灯台の建設に着手。1869 年に観音埼灯台（レンガ造）初点灯、1871 年（明治 4 年）に神子元島灯台（日本初の洋式灯台）と石室埼灯台（日本初の洋式木造灯台）が点灯。1932 年の台風で石室埼灯台が大破し翌年 RC 造に改築、1963 年に改称で「石廊埼灯台」となり、1974 年の伊豆半島沖地震で被災し修復、1993 年には灯塔をタイル張りにし灯質（灯火の間隔と色）を変更したとのこと。現在の灯質は単閃白赤互光（16 秒毎に白光と赤光を各 1 回発する）で、白光が 61,000 カンデラ、赤光が 66,000 カンデラ、水平水面上灯高が約 60m、光達距離は 18.5 海里（約 34km）とのことです。伊豆七島で一番近い利島の最高峰宮塚山頂（508m）は約 40km 離れていますので、石廊崎から見えていてもそこまで灯火は届かないようです。しかし、道草ギャラリーその 84 で書いた水平線までの距離計算が正しければ、海抜 60m での水平線よりは遠くまで届くので、性能としては十分と思われます。灯台からの水平線を超えても、船の高い位置からはしばらく灯火が見えることになります。上の「約書」は、馬関戦争（1863・1864 年 下関戦争、四国艦隊下関砲撃事件とも呼ばれる）の賠償金減免と引換えに結んだ「江戸条約」で、その中に「外国交易のため開港する全ての港

への航海の安全のために必要な灯台、浮標、立標を整備する」とあるとのことです。

灯台より岬先端に近いところに 1300 年以上の歴史を持つ石室神社があります。旧称の「石室埼」はこの神社名からついたものと思われます。さらにその先に熊野神社があり歩いて行けるのはそこまで。先端からは神子元島（距離と最高海抜、約 9km・33m）がすぐ近くに見え、水平線上に伊豆大島（同、約 53km・758m）、利島（同、前述）、鵜渡根島（同、約 45km・209m）、新島（同、約 49km・432m）、式根島（同、約 49km・99m）、神津島（同、約 56km・572m）が確認できました。式根島の奥にさらに遠い三宅島（同、約 90km・775m）や、その少し右に御蔵島（同、約 116km・851m）も見えますが、八丈島（同、約 190km・854m）は見えないようです。伊豆半島自体が「ひょっこりひょうたん島」のように日本列島に流れ着いたと言われていますが、この石廊崎付近は現在でも毎年 4cm 程北に移動しているとのことです。

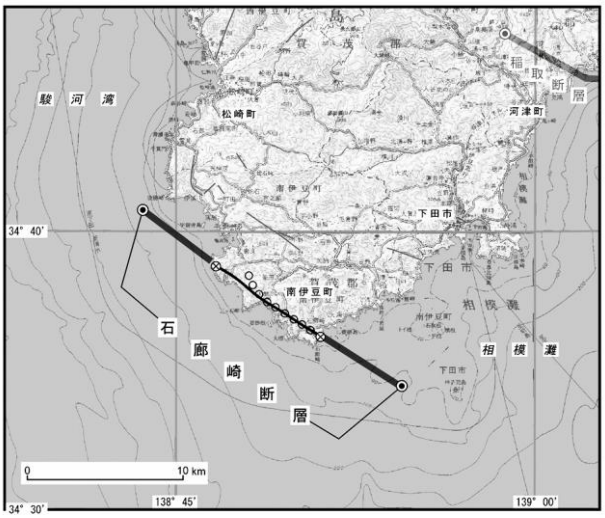
石廊崎オーシャンパークで美味しいみりん漬けサバ焼き定食を食べました。食堂利用で駐車料金の割引もありました。

青野川周辺には桜はまだでも、菜の花は咲いていました。下加茂温泉銀の湯会館では梅、また各地でアロエの花も道路端に見られました。海に注ぐ陽光には間違いなく春を感じられました。しばらく寒波が続いていましたので、もう時期が過ぎたと思って寄らなかった爪木崎のスイセンの花が、まだ残っていたかも知れません。なお、伊豆の別荘地で一番高い標高 800m程の天城高原では、3 月 19 日にも雪景色が見られました。

＜1974 年　伊豆半島沖地震＞

石廊埼灯台に来たのは、51 年ぶりでした。前回は 1974 年 5 月 9 日の伊豆半島沖地震の直後、M1 になったばかりでしたが研究室メンバー数名で、私が車を運転して建築物の被害調査に入ったときでした。半島を南下する国道に検問があり進入車が規制されていましたが、あるところから「調査」の一筆を頂いて入ることができました。下田の少し手前に宿泊して（夜中に余震もあった）、石廊崎地区と入間地区を調査させて頂きました。震源は石廊崎沖 5km 程（後の調査で陸上だったとの説もある）でマグニチュード 6.9－7.0、石廊崎から北西方向に右横ずれ断層が走りました。

石廊崎集落には地表にもはっきりとした断層が入り、それに沿って被害の大きな建物が並びました。集落の東端では、民家から 2m 程離れた高さ数 m のほぼ垂直な裏山（擁壁もない状態で崩れもしない岩のようなもの）が、垂直に切断され幅 40cm 程のずれが起きて、クランク状の垂直壁が出来ていました。ずれて露出した表面には粘土のようになった薄い層が付着していました。基礎はまだ無筋コンクリートの時代で、断層で切断されてずれていました。地震後 1 週間も経っていないのに、過半の基礎に合わせて、ずれた分は無視して新たに基礎を打ち直そうとしている家もありました。東立て広縁の下の地面に亀裂が直線ではなく少し蛇行して走った家もあり、そこにぽっかりと深い穴ができて、住人から「瓦礫をいくら入れても埋まらない」と伺いました。



石廊崎断層の位置（国土地理院データ）

石廊埼灯台は、前述の年表によれば RC 造だったとのことですが、現場打ちコンクリートの塔とは思えない被災状況でした。一定サイズの直方体石材の組積造が被災したような光景で、破れ目地で積んだ直方体ブロックの目地が拡がったり一部のブロックがずれて外周に飛び出したりしていたと記憶しています。半世紀前のことですが、映像記憶は割と鮮明に残っています。特別なサイズの補強コンクリートブロック造だったのかなと思います。そのとき撮った写真でも残っていればいいのですが、残念ながら見付けられませんでした。

石廊崎地区と入間地区とも、玉石に載った伝統的構法の民家や布基礎にアンカーされた比較的新しい住宅が混在していました。構造的一体感の無い増築された民宿のような建物もありました。多数の被災状況から、地震での建物の挙動や何故ここで壊れたか等々を学ぶ第一歩になり、その後建築の仕事をして行く上での貴重な経験となりました。どんな災害も起こってほしくありませんが、皆様も機会があればいろいろな被災状況を是非見て頂きたいと思います。「百聞は一見に如かず」です。それが、建築業界の責務である「大地震は起こっても大震災にはしない」ことを実現できる近道だと思います。

（写真撮影 2025.02.23）

＜ Google マップ参照 ＞　　**URL は、下の「PDF はこちら」に入り、アンダーラインをクリックしてください。**

石廊崎	https://www.google.co.jp/maps/@34.6035085,138.8439063,16.75z
下加茂温泉銀の湯会館	https://www.google.co.jp/maps/@34.6494574,138.8596674,16.69z
爪木崎	https://www.google.co.jp/maps/@34.6604803,138.9842572,16.92z
石廊崎地区集落	https://www.google.co.jp/maps/@34.6112974,138.8420948,17.95z
入間地区集落	https://www.google.co.jp/maps/@34.6293147,138.8097505,16.59z

（2025.04.01）